



学校教育目標  
・進んで学ぶ生徒(知)  
・心豊かな生徒(徳)  
・たくましい生徒(体)

### 第48回 卒業証書授与式 式辞より

早春の日差しの中、土には、若草が萌え、美原中学校の木々には一雨ごとに、つぼみがふくらむ頃となりました。先ほど、卒業証書を授与しました、239名の卒業生の皆さん、卒業、おめでとうございます。

私は、令和3年4月、皆さんと同時に美原中学校に着任し、皆さんと共に、この三年間を過ごしました。入学式では、依然コロナ感染症が収束しておらず、さいの目の座席配置など、制限の多い入学式でした。そのような中であっても、私は、新入生に必ず伝える話をしました。

それは、「人生二度なし」を私に享受くださった、教育哲学者 森 信三 先生が言われた「人間は、一生のうち出会うべき人には、必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に」という言葉です。人の出会いは、偶然に観えても、その人にとって**必然**な出逢いであるということでした。(※ 必然：それ以外では、ありえない事)

美原中の3年間の生活では、私も皆さんも多くの人と出逢いました。コロナの影響で小学校では、できなかった宿泊学習でしたが、2年生では、山道を滑りながらも助け合って登った武甲山、3年生では、夏の熱い日差しの中、皆さんが初めて経験する修学旅行、日頃の生活では、知りえなかった仲間の人柄を知りえる貴重な機会を経験しました。自分たちで決めたコースで興味を深めた京都・奈良。そして、思い出の宿での足湯や夜の楽しい語り合いは、君たちの記憶に鮮明に残ったことでしょう。更に皆さんは、体育祭・美原祭では、最上級生の役割をしっかりと果たすという、後輩たちとの出逢いでも最上級生の役割を果たす伝統をしっかりと、つなげることができました。どれをとっても青春の貴重な一ページとして、残されています。

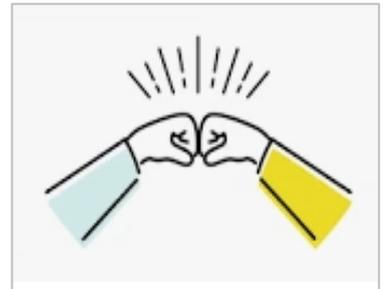
そして、もう一つ、人との出逢いについて、皆さんが経験したことを語らなくては、なりません。それは、「楽しさ」と表裏した「苦悩」についてです。皆さんは、この中学校の3年間で度あるごとにことにつまずき、転んで、人に思いを伝えられず、大声で叫びたいくらい、やりきれない思いをかかえたことも、あったはずですが、人にやさしくしてもらえず、涙を流すこともあったでしょう。私は、そのことも忘れないでほしいのです。それが「本気で生きる」ということなのです。そのことさえも大切にしてほしいのです。皆さんが、その苦悩の壁を本気で乗り越えようとした時、「自分は、頑張っているんだ、頑張ったんだ」と自分自身が思える瞬間こそ、皆さん

雪の日、枝に膨らんだ芽に雫がつかまりました。



が、眩しいくらいに輝いている瞬間なのです。それは、人知れず何気なく過ごしている毎日の中で皆さんだけが知っていることです。きっとそこには皆さんの心の中に「本気笑顔」があったはず。他の誰も知れない唯一無二の自分しか知らない価値ある中学校生活です。忘れないでください。

さて、卒業式は、単に「お別れ」だけでなく、次へのステージへの覚悟を固める節目の儀式でもあります。正に3年生を送る会のテーマ Take action です。「生きる」とは、大切な人との別れを重ねることであり、そのたびに「大人になる」のです。その、「大人になる」とは、様々な変化を受け入れるということです。今まで当たり前だと思っていた様々な毎日が変わります。容姿・交友関係・価値観・考え方など本当に多種多様です。また、会いたい人には、すぐに会えなくなることもあります。お互いに色々なものを背負い子どもの時みたいに、時間を忘れ語りあったりすることも、できなくなります。しかし、「大人になる事」で新しく楽しい世界も沢山見えてきます。新しい世界を見続けることは、苦しさと努力を伴いますが、私は、今この歳になって、その時間やチャンスがあることをつくづく素晴らしいものだと感じているのです。



最後に卒業生へのはなむけの言葉として「自分の周りに置くべき三人」についてお伝えします。

- 一、一緒にいて楽しいだけでなく 離れてさみしいと思える人をつくりなさい。
  - 一、一緒にいて楽しいだけでなく 一緒にいて素の自分でいられる人を選びなさい。
  - 一、一緒にいるだけでなく 何かあったら駆けつけてくれるそんな人を選びなさい。
- ぜひ、近くにそんな人を見つけて、そばにおいて幸せな人生を歩んでください。

最後に、この機会をお借りしまして、保護者の皆様にお話しさせていただきます。中学校の三年間は、いかがだったでしょうか。思春期の子どもを頭ごなしに叱っては、いけないと思いながらも、思うようにならない。ふとした時、子育てが不安になり、仕事が手につかず、モヤモヤした気持ちで眠れない夜もあったのではないのでしょうか。

私も二人の娘を子育てした身ですが、「親の心、子知らず」と言われる通り、教えることがプロであるはずの私も、我が子とうまく会話できず、妻の通訳を介しての話など、苦労しました。しかし、「子どもの心、親知らず」でもあったのです。親となってはじめて知れることもあるのです。私は、ある時から命があってくれればそれで良いと、究極の親の心理になります。娘が病にかかった時からです。この考えは、親が最初と最後にたどり着くところのように思います。

私は、生徒たちに何度か命の話をしました。これからもすると思います。学校の重要な使命は、お子さんたちをしっかりと保護者のもとに返すことです。私は、41年間の教師生活で幾度となく命と向き合ってきました。歳を重ねれば重ねるほど、ますます人の命は、それだけで尊いと実感しています。

私は、職員とともに美原中学校で学んだ生徒が、他人との違いや多様性を認め、共に幸せになっていくような社会を創造する担い手となってもらいたいと願いながら、ひとり一人の生徒に向き合い精進を重ねたつもりです。しかし教育にゴールは、ないのです。まだまだ、やれたのではないのかと、自分の力不足を悔いる自戒の念は、尽きません。きっと教職を続ける限りこの想いは、続くのだと思います。最後に保護者の皆様並びに地域の皆様、美原中学校を支えてくださった多くの方に三年間多くのご理解とご協力を賜ったことに深く深く感謝申し上げます、式辞といたします。

卒業生全員が次のステージで「本気笑顔」で活躍することを心より応援しています！

令和6年3月15日 美原中学校長 吉田 和生